

令和 5 年 6 月 15 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00120

研究課題名（和文）翻訳における概念形成と主体変容：20世紀ドイツ・フランスの思弁的翻訳論

研究課題名（英文）Concept Formation and Subject Transformation in Translation: Speculative Translation Theory in Twentieth-Century Germany and France

研究代表者

西山 達也（Nishiyama, Tatsuya）

早稲田大学・文学大学院・教授

研究者番号：40599916

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、20世紀のドイツ・フランスを中心に広まりをみせた翻訳をめぐる諸思想（思弁的翻訳論）が、(1) 人文・社会・自然科学の様々な領域を横断する形でいかなる概念形成と学知の編成に寄与したのか、また、(2) この諸思想が主体と思考の変容をどのように可能にしたのかを解明することを試みた。このように獲得された成果を通じ、現代世界において「翻訳の思想」が担いする役割、たとえば私たちの日常の生および日常言語を疎外する危険性をつねに孕んでいるグローバルな言語や科学の言語の一元化に対し、「翻訳の思想」が提供しうる抵抗のありかたについて、問題提起をおこなうことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

20世紀のフランス・ドイツにおける翻訳をめぐる様々な思想を、とりわけそれが可能にした学知と概念の変革可能性および主体の変容可能性に着目しながら調査した。翻訳とは単に複数言語間の記号表現を相互に置き換える行為ではない。それは新たな認識を創出し、実存を変革する営為でありつづけてきたのだが、こうした翻訳の営為をめぐる思弁的考察は従来の哲学・思想史研究においては主要な課題とみなされてこなかった。本研究は、あらたな思弁的翻訳論の可能性を提示することで、人類社会の一体化が深化するなかで、人間と言語の関係をめぐって生じる現代的かつグローバルな諸課題に対して実践的に応答を試みるものである。

研究成果の概要（英文）：This study aims to elucidate two main ideas: 1) how and to what extent the speculative translation theory in twentieth century Germany and France contributed to the various changes in conceptual frameworks in the humanities, social sciences, and natural sciences; and 2) what kinds of subject transformation this speculative translation theory has made possible to conceive of. The results obtained serve as a basis for constructing a theory of resistance against language homogenization in the global age and the potential alienation of our everyday lives and language. Furthermore, this research offers a perspective for re-examining different forms of intra-lingual translation, such as the problem of metaphors.

研究分野：現代フランス・ドイツ思想

キーワード：マルティン・ハイデガー ジャック・デリダ ジャン＝リュック・ナンシー ジルバール・シモンドン
ミーメーシス カール・レーヴィット エマニュエル・レヴィナス 翻訳の思想

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

普遍的な概念と論理にもとづいて構築された学問知においては、伝統的に、普遍言語によって記述された知の体系こそが理想的であると考えられる一方、「翻訳」をめぐる諸問題は、理論と実践の境界に位置する曖昧な事象という性格を与えられてきた。しかしながらいかなる学知も、先行する知の体系や概念を伝承・継受するにあたって、たえず翻訳を遂行し、ときには既存の翻訳を批判し、新たな翻訳を提示することで、思考そのものに変革を生じさせ続けるものである。

本研究代表者は、これまで、思考の歴史にとって翻訳という営為がいかなる意味をもつかという問いに導かれ、20世紀ドイツ・フランス思想の領域において研究を遂行してきた。なかでもマルティン・ハイデガーの思想を研究対象としてきたが、この哲学者は、思考そのものを生成させ変革する翻訳の作用を「思惟する翻訳 [denkende Übersetzung]」と呼び、その可能性を探究した（「思惟する翻訳」の実践と不即不離の関係にある《翻訳をめぐる思想》を、以下においては《翻訳の思想》と呼ぶことにする）。

20世紀のフランス・ドイツ思想は、相互に影響し合い、思想を翻訳することで、特異な《翻訳の思想》の数々を出現させた。なかでもヴァルター・ベンヤミン、ローマン・ヤーコブソン、ハンス＝ゲオルク・ガダマー、ジャック・デリダ、あるいはミシェル・セールらが、各々の言語思想の基礎づけの部分において翻訳の問いを提起している。これらの先駆者たちの洞察に続いて、より実証的なかたちで考察を発展させたり、あるいは原理的な問いかけを深化させたりする研究も現われている。1970年代以降、たとえばジョージ・スタイナー、アントワーヌ・ベルマン、フィリップ・ラクー＝ラバルトらが発表した一連の研究は、すでに古典的研究とみなされつつある（George Steiner, *After Babel*, 1975; Antoine Berman, *L'épreuve de l'étranger*, 1984; Philippe Lacoue-Labarthe, *L'imitation des modernes*, 1985）。

これらを踏まえて、本研究開始までに本研究代表者は、20世紀のフランス・ドイツで展開した《翻訳の思想》が、ある種の歴史意識、歴史批判機能、そして歴史哲学的前提を内包していることに着目し、それが思想史における概念知と思考の変動そのものの根底を照射する思想であったことを明らかにした。しかしながら、この過程で、次の問いの解明が未着手であることが判明した。すなわち、《翻訳の思想》がある種の歴史意識や歴史批判機能を内包しているとして、それでは思想の翻訳が遂行される際の歴史意識や批判機能を担うのはいかなる主体なのか、また、そうした思想の翻訳はいかなる概念形成と学知の再編をもたらしのかという問いである。これが本研究を導く問いとなった。

2. 研究の目的

本研究は20世紀のドイツとフランスを中心に出現した翻訳をめぐる思想に着目し、この思想の潮流がいかなる仕方でも展開したかを明らかにすることを目的とする。翻訳という実践的活動のはらむ問いは、思想史の研究において避けることのできない問いであるにもかかわらず、従来の概念史や観念史の枠組みにおいては副次的なものとして見なされ、そのものとして解明の対象とされてこなかった。本研究は、(1) 翻訳をめぐる思想が20世紀フランス・ドイツにおいて、多様な学問領域を越境しながら、いかにして新たな概念の創出と学知の編制に関与したのか、そして、こうした概念と学知の変革可能性をどのように理論的に思考したのかを浮き彫りにするとともに、(2) この思想潮流が、単独的でありかつ複数的な主体と思考の生成と変容をどのように捉え返したのかを解明することを目指す。

3. 研究の方法

本研究は、第一に、20世紀の哲学において提起された翻訳の問いと、翻訳をめぐる思弁的考察を、フランス思想とドイツ思想の境界を横断しながら検証した。ところで、20世紀における《翻訳の思想》の展開の場として、世紀前半に開始した現象学運動の進展が果たした役割は無視することのできないものである。本研究では、第一に、現象学運動という肥沃な土壌と接続することで出現した《翻訳の思想》の諸相を析出するとともに、第二に、《翻訳の思想》を媒介としつつ、いかなる仕方でも人文・社会・自然科学の知（哲学、解釈学、神学、文学、文献学、言語学、情報科学といった多様な領域の知）が交差することになったのかを、いくつかの事例にもとづき明らかにするという方法を採用した。

4. 研究成果

研究成果は以下の四点にまとめられる。

(1) 本研究が第一の起点とするのは、20世紀のドイツ・フランス哲学において大きな思想潮流となった現象学運動という場である。そのなかから、本研究においては、1930年代から50年代にかけて現象学の諸思想がフランスにおいて受容された際の動向をめぐり基本的な資料収集をおこなった。とりわけ近年刊行されたデリダの初期講義（『ハイデガー：〈存在〉の問いと〈歴史〉』、高等師範学校での講義、1964/65年度）とフッサールやレヴィナスに関するデリダの既刊著作群との関係、さらには1960年代までのフランスにおけるフッサールおよびハイデガーの受

容のコンテクストとの関係を精査した。これにより、現象学運動において言語の問いがどのように展開し、「翻訳」という営為をその範例とする思考／言語の変容可能性、歴史性一般がどのように考察されたのか、そして翻訳の実践において概念が生成・変容し、概念の布置が再編成されるという現象がどのように思考されたのかを検討するための足掛かりが獲得された。

この調査にもとづき、本研究は、ハイデガーおよびデリダが各々「存在論の歴史」と「形而上学」と呼ぶものに対して遂行した変形／翻訳／解釈の作業の現場に接近し、その具体的な手続きを、デリダの『ハイデガー』講義を精読することを通じて検証した。その結果、次の二つのことが明らかになった。すなわち第一に、この講義においてデリダは、ハイデガーの『存在と時間』のいくつかの箇所を重点的に読解しながら、その読解可能性を拡張しようとしたが、翻訳と註解の操作を通じて、ハイデガーのテキストに見いだされるある特徴、すなわち、そこで徴候的に露呈している《翻訳の思想》を際立たせようとしているということ。第二に、ハイデガーは「存在の問い」を反復しつつ形而上学の語彙を翻訳しなおす作業を「思惟する翻訳 [denkende Übersetzung]」と見なすのに対し、デリダは、「翻訳」と「思考」をいわば媒介する語りの様態として「物語 [μῦθος, αἶνος, récit]」の契機に着目し、この契機から出発して「形而上学」のテキストの読解可能性を拡張するための脱構築的な手法を確立していったということ、である。これらの成果は「Erzähl mir keine Geschichten! : ジャック・デリダによる『存在と時間』読解」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第66輯、2021年)にて発表された。

(2) 次に、本研究は、20世紀の《翻訳の思想》において「思考と主体の変容」というテーマが具体的にどのように捉えられたかを検証した。この作業は、現代哲学がプラトン哲学とどのように対峙したかを再検討するという手法を用いておこなわれた。ここで本研究が着目したのは、

(a)「洞窟の比喩」と(b)「ミーメーシス」概念という二つの契機において範例的に見いだされる思考と主体の変容の主題である。

(a) プラトン『国家』第七巻における「洞窟の比喩」は、西洋思想史を通じて、たえず翻訳・解釈・変奏され続けてきた主題である。とりわけニーチェ以降の現代哲学においては、「洞窟の比喩」をめぐる多様な解釈のヴァリエーションが提出されてきたことは周知のとおりである(Cf. Hans Blumenberg, *Höhlenausgänge*, 1989)。本研究は、ハイデガーとジャン＝リュック・ナンシーによるプラトン「洞窟の比喩」の再解釈をとりあげ、両者において「洞窟」からの脱出がいかなる意味を持つのかを検討した。その結果、図式的に要約するならば、ハイデガーが「形而上学の歴史」を《洞窟のなかに》押し込め、《そこからの脱出》を構想するのに対し、ナンシーは《洞窟そのもののなかに脱出の契機を内在化し》、内在的超越論と呼びうるものを構想していることが明らかにされた。以上の成果は「Homo sapiens monstrare」と題する論攷において発表された。この論攷は、後期旧石器時代の洞窟絵画をめぐる哲学の言説——哲学の言語が原初のイメージをどのように語るか——を検討するという内容を含むものであり、現代のイメージ論・絵画論・記号論・人類学の研究における「思考と主体の変容」の主題に関しても併せて調査した(「Homo sapiens monstrare : ジャン＝リュック・ナンシー「洞窟のなかの絵画」を読む」、『洞窟の経験 : ラスコ壁画とイメージの起源をめぐって』所収、水声社、2020年)。

(b) ここから引き続いて、本研究は現代哲学がプラトン哲学における「ミーメーシス」の問いにどのように向き合ったかを、(a)と関連づけるかたちで検証した。具体的には、(a)において取り上げたナンシーが、とりわけプラトン対話篇『ソフィスト』の存在論およびそのミーメーシス論をいかに解釈し、「ミモントロジー」という独自の存在論へと創造的に統合していくかに着目した(mimontologieはミーメーシス論[mimétologie]とは異なり、mime[真似をする者]とontologie[存在論]を合成した語)。ミーメーシスの問題をめぐる現代哲学の研究は、詩学、解釈学、古典文献学、文学、社会思想、政治哲学、等々の研究(Cf. デリダ、リクール、ジラルール、ヴェルナン、ラクー＝ラバルトらの諸研究)が交錯する領野であり、ナンシーの思考はこの領野を開拓する先駆的な事例のひとつをなすものである。こうした考察にもとづき、本研究ではナンシーとハイデガーのミーメーシス論を再検討し、これを〈思考と主体の変容〉のテーマ系のもとに捉えなおした。以上の研究成果は「ミモントロジー : ジャン＝リュック・ナンシーによる『ソフィスト』読解」において発表された(『思想』第1172号、2021年)。

(3) 本研究は、さらに、科学認識論および技術哲学の分野で重要な研究をおこなった思想家ジルベール・シモンドンにおける《翻訳の思想》に関する調査・研究を遂行した。シモンドンはアリストテレスからゲシュタルト心理学や集団心理学、サイバネティクス、行動生物学、等に至るまでの個体化の理論を再検討することで、諸科学の領域を越境する概念と学知の再編にかかわる新たな思考を切り開いた思想家である。彼は共通地平を前提としない複数のオペレーションのあいだの移転を可能にするものに着目し、こうした移転・交換・変換の一般理論を「アラグマティクス」(ギリシア語 ἀλλαγὴ から作り出された用語)と命名する。研究代表者は、シモンドンが博士号請求のための主論文として1957年に提出した論文においてアラグマティクスの理論を発展させて生み出した「転導性」の思考を、《翻訳の思想》——いわゆる言語間翻訳にとどまらない「広義の翻訳」の思想——のヴァリエーションのひとつとして解釈し、それが同時に学知の諸領域を横断することの可能性をめぐる理論であったことを指摘した(書評論文「個体化と転導的思考 : ジルベール・シモンドン著『個体化の哲学 : 形相と情報の概念を手がかりに』」、『西日本哲学年報』第28号、2020年)。

(4) 総括

以上の研究を総合して、最終年度においては、《翻訳の思想》が広義の「翻訳」概念をいかにして構想したのかをあらためて検討した。そのための立脚点の一つとして選んだのが「メタファー」概念——修辞的文彩の一種であると同時に言語の動態そのものとしてのメタファーの概念——である。具体的には、本研究は、エマニュエル・レヴィナスの1950年代後半から1960年代前半にかけての講演原稿および準備草稿（著作集第1巻および第2巻所収）を読解し、そのなかでカール・レーヴィットの1958年の論考「人間の媒介者としての言語」がいかに批判・吟味され、「絶対的メタファー」の概念が構想されているかを精査した。その結果、両者が共有する言語哲学的な地平と相互の差異、とりわけ超越／内在をめぐる思考の差異、そして両者がともに参照するハイデガーの存在論との関係のずれが浮かびあがった。この研究成果は西日本哲学会シンポジウム「メタファーをめぐる思考——生・超越・言語」の提題「絶対的メタファー：レーヴィットからレヴィナスへ」（2022年12月11日、於 鹿児島大学）にて発表された。このことにより、1960年代以降の《翻訳の思想》として、ブルーメンベルク、デリダ、リクールの翻訳論およびメタファー論にも照明をあて、翻訳による言語の変形可能性の条件についての今後展開しうる研究の枠組みを素描することができた。このような「広義の翻訳」をめぐる《翻訳の思想》に着目することは、とりもなおさず、私たちの日常の生および日常言語を疎外する危険性を孕むグローバルな言語や科学の言語に対し、いかなる抵抗の拠点を提供しうるのかをめぐって、一定の見通しを示すものにほかならない。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 西山 達也 | 4. 巻 1172 |
| 2. 論文標題 ミモントロジー：ジャン=リュック・ナンシーによる『ソフィスト』読解 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 『思想』 | 6. 最初と最後の頁 93-101 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |
| 1. 著者名 西山, 達也 | 4. 巻 第66輯 |
| 2. 論文標題 Erzaehl mir keine Geschichten！ ジャック・デリダによる『存在と時間』読解 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 文学研究科紀要 | 6. 最初と最後の頁 25-39 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |
| 1. 著者名 西山, 達也 | 4. 巻 第28号 |
| 2. 論文標題 個体化と転導的思考：ジルベール・シモンドン著『個体化の哲学：形相と情報の概念を手がかりに』 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 西日本哲学年報 | 6. 最初と最後の頁 93-99 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34326/pawj.28.0_93 | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |
| 1. 著者名 西山達也 | 4. 巻 35号 |
| 2. 論文標題 書評「亀井大輔 著『デリダ 歴史の思考』」 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 実存思想論集 | 6. 最初と最後の頁 199-201 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 西山, 達也 (共著) | 4. 発行年 2020年 |
| 2. 出版社 水声社 | 5. 総ページ数 267 |
| 3. 書名 「HOMO SAPIENS MONSTRARE : ジャン=リュック・ナンシー「洞窟のなかの絵画」を読む」(『洞窟の経験 : ラスコ=壁画とイメージの起源をめぐって』所収、175-214頁) | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|